

市史講座第8回ミニレポート

11月10日(土)第8回の講座が開かれました。

第1部：「山陰地方の縄文時代—松江市域を中心に—」(講師:国立歴史民俗博物館准教授 山田 康弘 先生)



山田先生は、縄文時代は気候の温暖化により動物・植物相が大きく変化した時代で、弓矢や縄文土器の使用や定住生活を始めた時代、土偶など呪術具を使用した時代であることを説明されました。

また、現在では当然の定住生活は約2～1万年前から始まったらしく、700万年前までにさかのぼる人類史的に見た場合、非常に新しいライフスタイルで、ヒトの歴史のほとんどは移動生活をしていたことを話されました。

そのうえで、山陰地方の縄文社会は、住居が2～3棟程度の小規模集落で住居構造があまり堅牢でないことから長期にわたる定住生活を志向していないこと、また、呪術具が少ないことから、それらを必要としない社会、つまり不安の少ない社会であったことを指摘されました。

それは、定住に伴う社会的な問題を少人口・移動生活で回避していたのではないかと。そして、それは現代においても山陰地方の縄文社会から学ぶことができるのではないかとまとめられました。

第2部：「松平直政書状を読む」(講師:福島大学准教授 三宅 正浩 先生)



三宅先生は松江藩初代藩主松平直政が家臣に宛てた二通の書状により、文章中には記されていない年代や当時の状況、宛先者との関係等を読み解くという、書状ならではの醍醐味を味わい、より深く内容を理解する方法をお話しされました。

残存する記録や文書が少ない江戸時代初期には書状は政治・支配を解明するための重要な一次史料であることを述べられ、しかし、時を経て読むものには意味不明なことも多く、これを読み解くため、飢饉や洪水などの天変地異の状況や参勤交代の年代等について、参考となる後の編纂物や論文等により、当時の状況や年代、関係人物を特定することができることを解説されました。